

リハビリ検討会

2月25日(日)アシストジャパン7号館にて開催

症例：15歳 女児

厚脳症

家族のニード

「側弯の進行が気になっている。脊柱のオペを進められているが悩んでいる。」

〈評価・運動療法〉

人に興味があり周囲をよく観察し認識が高いが情動とともに筋緊張が高まる。

背臥位になると、周囲を見渡し自分の見たい方向を見ようとする。しかし、頭部の運動に連動し胸郭のねじれが生じ、非対称な反り返りの習慣化がみえる。

下肢足底へ触ると過敏性があり意図しない全身過緊張スパズムが拡がり、体幹の非対称性を助長する反り返りへとつながっている。

腰背部の過緊張を強め、両側の広背筋、多裂筋の過緊張により肩甲骨の不安定さの代償運動として両上肢は挙上し肘屈曲位となっている。

股関節は外転外旋位を呈し、ハムストリングスの短縮、足部内在筋は委縮し足部のアライメントは不均衡を呈している。

〈背臥位：下部体幹の安定性の保障〉

① 体幹と骨盤のアライメントの調整。

足底左骨頭が求心性に引き込まれており、大腿骨頭を白蓋か牽引しながら、股関節周囲筋の軟部組織に感覚入力を行っていく。

股関節屈曲、腸腰筋やハムストリングスの同時収縮ができず過剰反応による反り返りがみられていた。

骨盤周囲の安定性を促通し、コア筋の活性化が促されてくると全身に波及していたクロウヌスは減弱してくる。



② 肩甲骨の外転を引き出しながら、前方へリーリング

後頸部を伸長させ顎を引き、コア筋の活性化をはかり下部体幹の安定性を保持し前方へのリーチングを促していく。随意的なリーチングは見られないが、声掛けに応じて対象物に意識を向けることができた。

時折、周囲の声に注意がそれて頸部過伸展となり、リーチングの課題に集中できるように、枕で側方の視界を制限し、「親指を近づけるように」と具体的な言葉かけで誘導した。

肩関節屈曲90度を超えると肩外転の代償運動がみられていた。本児が受け入れる可動範囲内での誘導を行った。

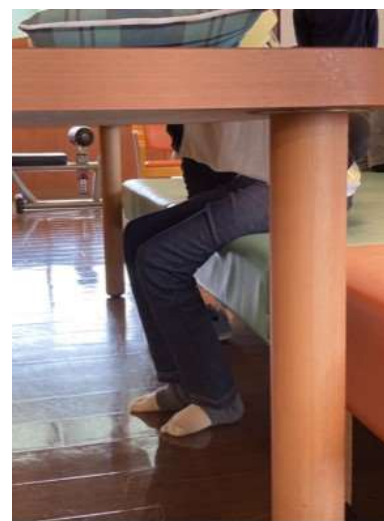


〈座位：胸郭の可動性改善と座骨支持〉

動的側弯装具着用介助時、体幹と骨盤の分離が促され殿部離床しやすくなり着用負担が改善されている。骨盤は対称的であり左右の座骨に均等に支持できている。

胸郭のねじれも減弱し、上肢を前方へ保持したままリラックスした座位姿勢を保つことができている。

周囲の音が気になると視線が左右へ動きやすく、大きな音がすると頸部過伸展し腰背部筋の過剰出力/過緊張が出現するが両上肢挙上はみられず端座位が保てている。



〈まとめ〉

情動や注意の影響によって、意図しない過緊張スパズムが出現し体幹の非対称性が助長され、背臥位姿勢、座位姿勢を保つことが難しく偏りを強めていた。

本児は、思春期頃である第二次成長期であり、骨成長と筋軟部組織の発育バランスが崩れ変形拘縮を加速する時期であり、姿勢の非対称性が胸郭にゆがみを生じさせて側弯を助長させる要因となってくる。

今回、背臥位で骨盤後傾し筋短縮筋へのアプローチ、対称的な体幹のコントロールを得ることで、過緊張による筋スパズムは減弱し、腰部・股関節周囲の筋・皮膚軟部組織の粘弾性が確保できた。骨盤帯の運動からコア筋群の活性化につながり結果的に胸郭部のアライメントが整っていった。

症例を通して、非対称性の姿勢を助長し側弯を増強する要因は何なのかをセラピスト、母親、学校教諭と共有していくことができた。側弯は、環境、運動の問題や呼吸、摂食・嚥下などさまざまな問題が相互に絡みあっており、現状の問題を一つずつ整理分析し日々の関わりを実践していくことが必要と考える。